

---

# 魔法少女と慟哭の戦士

やまあざらし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女と慟哭の戦士

### 【コード】

N2836M

### 【作者名】

やまあざらし

### 【あらすじ】

僕には殺す力しかもっていなかったけど、その力で、彼女を守りたいっていう幻想を抱いてしまったんだ。

## 0 話目

もしも時間が巻き戻せるのなら、僕は君に伝えたい。

あの恋は僕にとって炎であると同時に光であったのだと。

あの頃の僕は世界の全てが敵意に見えて、冷たく鋭い槍を閃きかせているかのように想っていた。

お前は必要のない人間だ。幼いころから言われ続けたその言葉はまるで蛇のように心臓に絡み付き決して解けることのない呪詛のように僕を縛り続けていた。

その呪いを解いてくれたのが君だった。

春水の流れる暖かな風が吹く丘で下弦の月を見上げながら君が言った何気のない一言が僕の中にある重い塊を雪のようにとかしてくれたんだ。

その時、僕を覆っていた暗い空が雲の如くに掃われて晴れ渡る青い空を見るような喜びを覚えた。

そして僕は君に恋をした。

単純だと君は笑うだろうか。でも僕が一番望みながらもだれも掛けてくれなかった言葉を君は当たり前のように僕に与えてくれた。まるで渴いた砂漠に水がしみるように君の存在が僕の中に広がっていった。

僕の世界を優しく、美しく輝かせてくれたのは君だった。

君を失った世界は再び、冷たく、暗い、海の底のようなところに戻ってしまった。

僕は、本当は、ずっと、ずっと、君と一緒にいたかった。

それでも、僕は君を裏切らなければならない。

謝罪はしない。僕には君に許しを請う権利など持っていないと知っているから。

だけど、これだけは信じてほしい。

僕は、君に一生分の恋をした

ここ半年で世情は大きく変わった。

留まる事を知らない大河の如くに流れ移ろう時代の中で、常識や正義もともに変化してゆく。

今はまさに、その節目と呼ばれるものなのだろう。

国を統べるものが変わり、同時に始まった魔女狩りとも呼べる異端の虐殺。

正義という大義のもとに創り出された者たちに、人知を超えた殺戮と理不尽なまでの死途が降りかかった。

アトリ・アランもその災厄が降りかかった一人であった。

そこは木の枝や葉っぱに遮られて光の射さない暗闇の世界だった。

春の訪れを知らせる、柔らかく温かな風に鼻を突き抜けるような粘ついた、血の匂いが孕んでいる。

隙間がないほどに生い茂る草木は撒き散らされた血によって赤く染まっており、まるでそこだけが異世界のように、夜の闇さえも血の赤に染まっていくかのように思えた。

森の中に道標のように点在する、切り裂かれ、引き千切られたかつて人間だったモノ、今となっては壊れたスプリングラーのように血を吐きだすだけのモノを追っていくと大樹に背中を預けて、力なく頂垂れているアトリがいた。

身に纏う外套は原形を留めないほどにボロボロになっており、その隙間から生温かい血が溢れ出ている。

アトリは包み込むように、小さな幼子を抱えていた。

その姿は、さながら、子を護る手傷を負った野生の獣を彷彿させる。

幼子は、目の当たりにする殺戮に感情がついていかなかったのか涙を流しながら気を失っていた。

規則的に呼動する小さな命を感じ、アトリは思った。

自分は何も護ることができなかった、と。

誓いも、約束も、命も、誇りも何一つ護ることができなかった。

遠方から枝葉をかき分けながら迫ってくる人の声が聞こえてくる。しかし、アトリにはもう歩くどころか意識を保つ気力さえも残っていないかった。

懺悔と悔恨の蛇が締め付けるかのように心臓が苦しくなるにもかかわらず、アトリの視界は徐々に霞がかかり、自分たちを追ってくる声に霞がかかる。

そしてアトリは、自分の意識の手綱を闇の深淵へと手放した。

## 0 話目（後書き）

内容があまりにもアレだったので一度削除して書き直しました  
未だに原作を見ていないので、話に矛盾が生ごみにたかるウジ虫の  
如くに出てくると思いますが、生温かい目で見守ってください

## 1 話目

夜の森の冷やかな風が頬を撫でる。

空へ向かい寄り添い、重なり合う葉々は差し込む月の光でいくつもの黄金色の小さな天使の梯子を作り、僅かばかり暗闇を照らす光となっっている。

香るのは冷たい空気に孕んだ森の青臭い植物と土の匂い。そして、むせかえるような鉄の匂い。

聞こえるのは、雌を呼ぶための羽虫の音色と囀るフクロウの鳴き声。そして気が狂ったかのように泣き叫ぶ少女の声。

フェイト・T・ハラオウンは困惑していた。

今、フェイトがいる場所は時空管理局、遺失物対策部隊機動六課の隊舎の裏にある雑木林の中だった。

そこは、雑木林とは名ばかりで実際は人が手を加えていないために極双林となってしまうている普段誰も足を踏み入れることはない場所だ。

それに加えて、今は深夜の時間帯。ちょうど丑三つ時あたりだろうか、子供がこんな場所にいるということは常識的に考えてありえない。

年の齡は五つほどだろうか、後ろ姿しか見えないが赤に近い茶色の髪を猫の尻尾のように後ろで一つの三つ編みにしており、金糸の細かな刺繍の入った赤い羽織を白の腰布で止めた、ミッドチルダではまず見かけない民族衣装のようなものを着ている。

森の闇にとけているうえに、少女の影になって見えづらいが、何

か黒い塊のようなものに縋りながら言葉にならない声をあげて泣きじゃくっていた。

一瞬、幽霊の類ではないかと頭の中を過ったが少女には確かに足はある。

何者なのだろうか…、

フェイトは少女に事情を聞こうと、一歩足を踏み出すと、乾いた音が森に響いた。

木から落ちた小枝を踏んでしまったのだ。

そしてその音は、フェイトが思っていた以上に響いたらしく、少女はまるで電気が奔ったかのように体を跳ね上げると、脊髄反射を介さないほどの勢いで音を出したなのはの方を見た。

「え、えっと…こんばんは…？」

フェイトは少女の突然の行動に呆気に動揺しながらも、自分の顔を見て固まってしまった少女に挨拶をした。

少女を不安にさせないようにと、笑みを作ったのだが、挨拶の代りに少女は何かを護るように手を大きく広げると大粒の涙を流しながらフェイトのことを射殺さんばかりの敵意を込めて睨みつけてきた。

さすがにこれにはフェイトも動揺した。

それは、突然向けられた敵意だけではなく、少女の顔にのっぺりとした血糊が付いていたからだ。

憎悪のこもった大粒の青い双眸と、僅かに赤く染まっていない肌の部分は夜の闇に映えるほどに陶器のように白い。

笑えば誰もが見とれるほどのかわいらしい少女だろうが、敵意と

悲哀で歪められた表情はとても自分よりも遥かに年下の少女が作り出すものとは思えなかった。

「な…、で…？」

「え…？」

「なんで…、私たちを放っておいてくれないの…？  
どうして…私たちを、虐めるの…？」

震える声で少女はフェイトに尋ねてきた。

青い瞳からは滴が溢れ出ており、顔にこびりついている血糊を溶かして、まるで血の涙を流しているかのように見えた。

「私たちは…、何もしてないのに…、ただ…静かに過ごしたい…だけなのに…」

少女からは、まるで親の敵と話しているかのように言葉の節々から憎悪が滲み出ており、必死の形相でこれ以上近づいてくるなどばかりに牙を向いた。

そんな少女が、フェイトの目にはひどく痛々しく、そして哀れに映った。

同情か、憐憫か、若しくはその両方なのか判らないが、心の中に黒々とした重苦しいものが広がっていく。

フェイトは努めて柔和な笑みを作ると刺激しないようにゆっくりとだが確実に少女との間合いを詰めていった。

「大丈夫だよ？私はあなたを虐めたりなんかしないから」

「嘘だ…、みんなそう言って私たちを殺そうとした…」

少女はフェイトが近づいてくるたびに恐怖のためか、カチカチと噛み合わない歯を鳴らし、逃げ腰になりながらもそこから動くことは決してしなかった。

それは恐らく、少女の後ろにある黒い塊が原因なのだろう。

人間なのだろうか…、先ほどから死んだように動かない。

もしも、負傷者ならば一刻も早く六課の隊舎に搬送すべきだ。

フェイトは手を伸ばせば少女に届く位置まで来ると、静かに腰を下ろした。

「安心して。ここにはあなたに意地悪する人なんて誰もいないから」

今にも破裂しそうな強い警戒心を持つ少女に対して宥めるように、フェイトは言葉を紡いだ。

「私の名前はフェイト・T・ハラオウン。あなたのお名前は？」

「…、ティレケ。…ティレケ・アラン」

少女は、僅かばかり逡巡し、警戒しながらも律儀にフェイトの問いかけに答えた。

「じゃあ、ティレケちゃん。握手しよ？」

フェイトの突然の脈絡のない発言にティレケは目を丸くした。

「…どうして？」

警戒心と猜疑心をむき出しにして尋ねるティレケとは対照にてきに、包み込むような柔らかな笑みを崩さないままフェイトは言葉を続けた。

「どうしてって…、私はティレケちゃんとお友達になりたいからかな」

「とも…だち？」

探るようにフェイトの言葉を鸚鵡返しするティレケに、フェイトは満足そうに頷いた。

「友達になるにはね、名前を呼び合えばいいの。だからティレケちゃんもわたしの名前を呼んで？」

「フェ…、フェイト…」

「うん。これで私とティレケちゃんはお友達だよ」

「私たちは…“アダム”なの？」

“アダム”？

フェイトは聞きなれない単語に、顔には出さないものの微かに苦い思いが広がっていくのを感じた。

組織の名前か、はたまた何かの比喻なのか、少なくとも“アダム”というものが、この少女を苦しめていることだけは判った。

「ティレケちゃんは、ティレケちゃんでしょ？他の何かであることなんて関係ないんじゃないかな？」

フェイトには、どういう訳かティレケの姿が昔の自分に重なって見えた。

愛されようと必死になってもがいて、それでも一番愛して欲しかった人は最後まで自分を愛してはくれなかった。

今でも、たまに夢で見る。最期に会った時に侮蔑のこもった視線で言われた母親の言葉。

フェイトは、あの時に自分が一番欲しかった言葉をティレケにかけた。

ティレケは、一瞬だけ鈍器で殴られたかのような表情を作ると、敵意の和らいだのか熱い滴を目に一杯に溜めて躊躇いながら震える手で、差し出されたフェイトの手を取ろうとした。

指先と指先が触れ合う。その瞬間だった。

しゅん、と刃物が大気を裂く音。

「え？」

## Protection

気が付くよりも千倍速い、反応できたのはフェイトのデバイスであるバルディッシュだけだった。

フェイトは差し出した腕をとっさに引っ込めて飛びのいた。

頬に熱い感覚がして、フェイトは無意識に自分の手で触れると、ドロリとした温かいものが流れ出ている。

慣れない鋭利すぎる痛みは普段感じている痛みと同じ痛覚として認識できない。

——切られた？

——なぜ？

——誰に？

——いや、それよりも…、

バルディッシュの防護魔法を簡単に切り裂いた？

フェイトに考えている余裕はなかった。

瞬時にバルディッシュをセットアップし、白いラインの入った、黒を基調とした服の上に白い外套を羽織ったバリアジャケットを見に纏う。

ザリ、と土を擦る音。

フェイトはそちらに視線を向けると、フェイトに立ちふさがるようにティレケの前に立っている、黒い外套を羽織った、鳶色の髪をした男がいた。

森の間の中で爛々と輝く、緑の瞳はまるで宝石のように美しいのに、まるで感情というものがない。

しかし向けられる、その視線には先ほどのティレケの比にならないほどの憎悪と敵意、そして殺意を孕んでいた。

それは、あまりにも確実な憎悪。あまりにも純粹な敵意。子を守る、手負いの獣のような、美しさが高潔ささえ感じる殺意。

フェイトの頭の冷静な部分は逃げると警鐘を鳴らしている。しかし、足は竦み、体が凍りついたように動かない。

執務官のという立場上、多くの死途を見てきた。理不尽な殺戮を見てきた。多くの殺意を中てられてきた。

修羅場をくぐってきたつもりだった。死地を生き延びてきたつもりだった。

しかし、目の前の男に対峙した瞬間に、今までの自分が立ってきた戦場が児戯と錯覚してしまうほどの恐怖に支配された。

瞬間。ザン、という地面を蹴る音がフェイトは自分の足元から聞いた。

目の前には、外套の男が立っていた。

その速さは人と獣の違いだ。

フェイトが、最低限のライフラインとして取った距離が一瞬にしてゼロにされた。

フェイトは動けなかった。そして男は無機物を見るような瞳のまま、その無防備を嗤うかのように唇を歪めた。

—— ああ、終わりだ

男の目に迷いはない。

フェイトはただ、その光景を見上げる。

そこに在るのは闇と——今から自分を殺す彼だけだ。

男は刃物を持っていない手で、逃がさないようフェイトの白く、細い首を掴む。

男の手から伝わる体温は、驚くほどに冷たくて、死人のようだった。

表情はない。

ただ、本気だということだけは判った。

「ごめんね…、みんな…、」

フェイトは震えることもなく、男から視線を離さないで言う。

浮かんだのは、親友の顔、家族の顔、仲間の顔、そして、自分が保護した二人の子供の顔だった。

フェイトが言った謝罪の言葉は、みんなを置いて逝ってしまうことにあてたのか、それとも、自分の無力さを嘆いて言ったのか判らない。

そして、男は手にした凶刃を振り上げる。

微かに揺れる空気はあまりに無情なものだった。

そして、フェイトの視界は艶やかな血の赤に染まった。

## 一話目

死というものは、年齢も、性別も、貧富も、そして善悪にも関係なく突如として襲いかかってくるものだ

そして、あの時の僕は間違いなく死を享受しようとしていた

誓いも、誇りも、彼女と交わした約束さへ忘れて死という逃げ道に走ろうとしたんだ

あんなにも悲しんでいるあの子を、大事な、大事な、あの子が泣いているのに、怯えて、傷ついて、一人ぼっちで泣いているのに、僕は慰めることも、励ますことも、抱きしめることも、言葉をかけることもせずに、あの子を置いて、自分だけが楽になろうとした

笑ってしまえるほどに最低だろうか？

だけでも、闇よりも深い深淵の中で冷たい心臓を抱えるように生きてきた僕にとって、迫りくる死は蜂蜜のように甘く、魅力的だった

僕はこの身を、夢を、名前を、そして彼女との思いでさえも血で穢し、命で穢してきたというのに、まだ僕は自分の命の捨て甲斐を求めている

こんな生を生きていながら、自分はまだ心のどこかで、命を捨てる甲斐があるなにかのために捨てたかったんだ

そんな僕を否定してくれたのが君だった

そんな僕を叱ってくれたのが君だった

そんな僕を赦してくれたのが君だった

君の、その小さな唇から紡がれる言の葉はあまりにも綺麗事で、世間知らずの人間が言うような言葉だったけど、僕の心を、あの日の夜のように月のような淡い光が射しこんだ

僕にとって、それがどれほどの救いになったのか、君にはわからないだろう

だけど、どうか、これだけは言わせて欲しい

ありがとう、と

月並みで、平凡な言葉だけど、僕はこの言葉しか言えないし、これ以上の意味を持つ言葉も知らないんだ

「お兄ちゃん…、まだ起きないね…」

ひどく焦燥したティレケのか細い声が医務室に響いた。

眉根を寄せて、目の下に大きなクマを作りながら呟くティレケの横顔は、触れればそのまま崩れてしまいそうなほどに不安定で、大切な人がこのままいなくなってしまうのではないかという恐怖に溢れている。

強がることも、泣くこともせずに、ただ目を覚まさない兄を待ち

続けることしかできないティレケが可哀想で仕方ないのに、どうにかして慰めてあげないのに、うまい方法が見つからなくて、フェイトは喉が苦しくなり、胸が張り裂けそうになった。

「私…、ずっとお兄ちゃんが自慢だったの。すごく強くて、カッコよくって、優しくて…、お兄ちゃんがずっと一緒にいてくれるんだったら、私はきつと幸せになれるんだって…」

ティレケは震える声で、自分を責めるように告白する。

「だけど…、私はお兄ちゃんのウソに気が付かなかった…、気が付いた時には、もう全部終わって…、それが全部私のせいで…、私のために、お兄ちゃんは自分の幸せを全部失くしちゃった…。私のせいで…、お友達と喧嘩して、私なんか居なければよかったのに…、」

疲れ切った、焦点の合わない目をしながら語るティレケは、まるでフェイトの過去を見ているようだった。

大切な人を失ってしまうのではないかという恐怖と絶望は、かつてフェイトが歩んだ道だった。

しかし、ティレケとフェイトは違う。

ティレケはまだ、失っていないし、裏切られていない。

そして何よりも大きな違いは、もしティレケの兄がこのまま目を覚まさなければ、ティレケは本当に一人ぼっちになってしまふのだ。

あの時のフェイトには仲間がいた。

自分を叱咤し、支え、立ち直らせてくれた仲間が。

「そんなこと言ったらお兄ちゃんが悲しむよ」

フェイトはそつと腰をおろしてティレケの視線に合わせる。

「お兄ちゃんがそんなに頑張ったのは、ティレケちゃんが大切だったからだよ。なのに、ティレケちゃんがそのことを否定するようなこと言っちゃたら、お兄ちゃんの頑張りを否定してることになるんだよ？」

「でも…、」

「でも、じゃありません。それにお兄ちゃんは疲れてるだけだから、直ぐに目を覚ますってシャルマルさんも言っていたでしょ？」

「うん…、」

長いまつ毛を悲しそうに伏せるティレケに対して、フェイトは安心させるようにティレケの頭の上に掌を乗せて、癖のはいった柔らかな髪を梳くように撫でた。

あの夜から今日で五日の朝を迎えた。

あの時、フェイトの視界を赤に染めたのは男の血だった。

男は口から吐露した生温かな鉄の匂いをした液体でフェイトの身を穢して直ぐに、糸が切れたマリオネットのようにその場に崩れ落ちた。

地面に赤いものが混じる。

それは、倒れた男から流れる血――、そう理解し、命が助かったという、そのまま意識を失いかねないほどの安堵感がフェイトを

包んだ。

「——お兄ちゃん!!!」

絹を裂いたようなティレケの叫び声が、執務官としてのフェイトを引っ張り戻した。

それからのフェイトの行動は迅速だった。

気が触れたように泣きじゃくるティレケを魔法で眠らせた後、不得意ながらも、何もしないよりはマシだということで倒れた男に応急処置として治癒魔法を施すと、意識を失くしたティレケを左分けに抱え、男を右肩に担ぎ飛行魔法で夜天を駆けた。

無許可の飛行は始末書ものだが、緊急事態なのだ。

六課隊舎までの距離は遠くないが女一人が歩きで行くには荷物が多すぎる。

フェイトは肩から染み込んでくる温かい血を感じながら、六課に連絡を入れた。

フェイトを出迎えたのは、六課の隊長、副隊長をはじめとした部下のFW陣だったのだが、血に濡れたフェイトを見て、誰もが茫然としていた。

自分の肩で今にも命を落としてしまいそうな人間がいるにもかかわらず、誰も動かないことにフェイトは僅かばかりの苛立ちを覚え、声を荒げると、そこで初めて、蜘蛛の子を散らしたかのように誰もが慌ただしく動き出した。特にシグナムとグリフィスはフェイトが抱えていた男を医務室へと運ぶ力仕事を任され、搬送される男に並走しながらシヤマルは治癒魔法をかけ続けた。

隊舎の奥へと消えていく、男を見ながらフェイトはようやく腰を抜かすような安堵を感じた。

肉食獣から逃げ切った獲物はこういう気分なのだろうか、深く呼吸をした。

先ほどまでは必死だったために感じなかった、荷物のように抱えていたティレケの重みに気が付き、怪我をしないように属に言うお姫様抱っこと呼ばれる抱き方に直して、フェイトはその場にへたれこんだ。

その後は、ティレケの保護と、事情を隊長格に説明。

後に残すのはフェイトに切りかかった男の事情聴取だけだということに、一向に目を覚ます気配がない。

シャマルの話では、致命重傷を負ってはいたが峠は越え、今は眠っているだけの状態だと言っていた。

しかし、目を覚ますのはいつ何なるのか判らないらしい。

ふと、ティレケの小さな手がフェイトの頬に触れた。

「…痛い？」

右の頬に貼られた少し大きめの絆創膏の下には、まだ傷が残っている。

薄皮一枚切られただけで、後も残らないらしいが、フェイトの傷を見て幼馴染であり戦友でもある八神はやてと高町なのは、乙女の柔肌に、それも顔に傷をつけるとは何事だ、と憤慨していた。

「かすり傷だったし、大丈夫だよ」

フェイトはティレケの手を取って壊れものを扱うかのように優しく包みこんだ。

血の通った温もりと、微かに動く脈を感じる。

実はフェイトも、表情や言葉にしないながらもティレケが兄と言った男に燻るような怒りを感じていた。

それは、自分が傷つけられたことに対してではなく、こんなにも優しい子を一人にして悲しませているということにだった。

「ごめんね…、綺麗なお顔に怪我させちゃって…」

「せやな。取り合えず、お兄ちゃんが目え覚ましたらフェイトちゃんに土下座や」

突然、柔らかな訛りのはいった声が聞こえ、そちらに視線をやると、そこには時空管理局の制服に身を包んだ、鳶色の髪を肩のところで切った、女性が立っていた。

「はやて…」

いつの間にか医務室の扉に機動六課の部隊長であり親友である八神はやてがいた。

後ろには医務官であるシャマルもいる。

「その後にティレケちゃんにもや。フェイトちゃんをキズモノにただけでなく、こんな可愛くてよく出来たティレケちゃんを心配させるなんて言語道断横断歩道や」

はやてはそう言うと、ツカツカとハイヒールのかかたで床を鳴ら

してティレケの傍まで寄ると、ガバリと後ろから抱き上げた。

「ふひゃ!?」

あまりに突然の行動にティレケは頓狂な声を上げた。

「ああ、もう！ホントにかわええなあ！なんなんやこの生き物は！！！」

子犬の頭を乱暴に撫でるようにくしゃくしゃと掻きまわすと、ティレケは照れているのか顔を赤くしながらも抵抗らしい抵抗をしても、非力な子供の力でははやくには到底かなわない。

「早く次の休み来おへんかなあ…、したらティレケちゃんにいっぱい洋服買ったるのに…」

ティレケの抵抗をモノともせず愛玩動物よろしくに弄ぶ、どこか光悦とした口調のはやての言葉にフェイトは呆れたように溜息をついた。

確かに、今ティレケが来ている服は無地の黒いパーカーにデニムの短パンと言った味気のないものだ。

これは、出張中だったヴァイス・グランセニツク陸曹に子供を保護したから服を帰りに買って欲しいと連絡を入れたところ、ヴァイスは保護した子供を勝手に性別を勘違いして男の子用の服を買ってきたせいだった。

ティレケの容姿はかなり整っている。癖のはいつた赤毛も、陶器のように澄んだ白い肌も、宝石のような大粒の碧い瞳も、まるで名のある名工が作り上げた人形のようなようだ。

そんなティレケを好きなように着飾ることができれば、さぞかし

楽しいことだろう。

ちなみに、ティレケが最初に来ていた赤い民族衣装は血で汚れてしまっていたものの、高価そうだという理由で今ははやてが保管している。

そして、服を脱がした時に気が付いた、ヤギを模した木彫りのレリーフは、今、ティレケが首からぶら下げてパーカーの下に隠していた。

そのレリーフには見事な細工が施されており、ティレケによく似合っているため、フェイトやはやては隠さずに見せた方がいいと言っても、ティレケは頑なに聞き入れなかった。

「はやてちゃん…そろそろ…」

抵抗せずには済がままになっているティレケを見て、流石に見かねたのか、後ろでにこにこ笑って傍観していたシャマルが、止めに入った。

「おお、そうやった。実はフェイトちゃんに用事があつたんよ」

「私に？」

唐突にティレケの頭を弄ることを止めたはやての言葉にフェイトは首を傾げた。

レリックも一つ確保したし、特に急な案件もないはずだ。

「ここじゃアレヤから、ちよいと外でよか？」

「うん」

フェイトははやてに促されるまま部屋を出て行くことすると、服の裾に軽い抵抗感を覚えた。

「…行っちゃうの？」

そこにはティレケが捨てられた子犬のような上目遣いで、寂しそうに目を潤ませていた。

その表情を見て、はやては余りの可愛らしさに身悶えしているがフェイトはそれを無視した。

機動六課内でティレケが一番懐いていたのはフェイトだった。

最初に会ったのが原因か、はたまた、子供を二人も保護し育てているという母性からかは分からないが、よくフェイトと一緒にいるところを見かける。

フェイトが後見人を務めているエリオ・モンディアルとキャロル・ルシエは妹ができたと言って喜んでいた。

「うん、ごめんね。お仕事なんだ」

フェイトはティレケの頭を撫でると、一度浮かした腰を再び下ろしてティレケに視線を合わせる。

「でも、直ぐに終わるから。お仕事終わったら一緒にお昼ご飯食べよう。」

「…うん」

おずおずと手を離す、ティレケに今度はシャマルが後ろから優しく包みこんだ。

「大丈夫よティレケちゃん。フェイトちゃんは直ぐに戻ってくるから、それまでお姉さんと待ってましょ?」

「シャマル、ディスクの一番下の引き出しに大量のお菓子隠しとんの知ってんやで。虫歯になるからあまりティレケちゃんにあげんといてや」

「なっ、ななななななな、はやてちゃん!?なんで知ってるの!?!」

顔を真っ赤にするシャマルを見て、ティレケはおかしくなったの  
か思わず吹き出してしまっていた。

その表情を見て、フェイトは後ろ髪を引かれながらも、カカカと  
豪快に笑うはやての後について行った。

## S U C 話 目

フェイトがはやての後について行って、行き着いた先は技術開発室だった。

はやては、自分のIDを通すと、パシュツ、という金属がすれる音を出して勢いよく自動扉が開いた。

「あ、はやてちゃん、フェイトちゃん」

「あれ、なのはも呼ばれたの？」

フェイトがはやてに次いで部屋に入ると、甘栗色のサイドポニーの髪形をした、長年連れ添った戦友である高町なのはの姿があった。

「私もいますよー」

部屋の奥から出てきたのは、管理局の制服の上から白衣を羽織ったシャリオ・フィニーノがひょっこりと現れた。

シャリオ・フィニーノ、シャーリーの愛称で呼ばれる、丸眼鏡をかけた、流れるようなダークブラウンの髪を腰まで伸ばした彼女は本来の部署は通信士なのだが、同時にメカニックオタクであり、学生の中にデバイスを制作、管理ができるデバイスマスターの資格を所得したために機動六課のメンバーのデバイスの制作、整備も主任を務めている。

「まあメンツも揃ったし、始めよか」

はやてはそう言うと防壁結界を張った。

いくらんでも警戒しすぎではないか、と顔をしかめたのはフェイトだけでなくなのはもそうだった。

「とりあえず、今から送るデータはこの話が終わったら必ず削除すること。ええな？」

誰にあてたでもなく、いつものお調子の声色ではなく仕事しように切り替えたはやての凜とした声にフェイトとなのは身を引き締めた。

はやての普段の大粒の瞳は、こうなるとナイフのように鋭くなる。

「これから、聞くこと話すことには緘口令を敷く。本部にも、本局にも、教会にも、六課の誰にも言うたらあかん。このことを知ってるのは、今のところ私と、医務官という立場のシャマル。そして、デバイスマスターであるシャーリーだけや」

「待つて、どういうことなの？管理局だけじゃなくて、教会や六課の誰にも言っちゃいけないって…」

なのははやての言ったことに疑問を覚えた。

仲間という概念を誰よりも尊重するはやてが、その仲間に秘密事を作るというのだ。

「それだけ、これから話すことはヤバいってことや。想像はついとるかもしれないが、これはティレケちゃんと、そのお兄さん…アトリ君言うたか…、二人のことや」

はやては、そう言う自分の腕に巻いた腕時計型の端末を操作してフェイトとなのはに送った。

腕時計を触媒とし、空気中に映し出されたディスプレイを見てなのはとフェイトは首筋に冷たい蛇が張ったかのような感覚がした。

「あの夜、フェイトちゃんは寝る前に違和感を感じた、って言う  
とっとな」

「う…、うん。なんか首筋がピリピリってきて嫌な感じがしたから」

あくまで冷静さを保ちつつ、フェイトは一度ディスプレイから目を離して答えた。

「隠密性の高い、強力な結界を瞬間的に張った痕跡があったんや。それでフェイトちゃんをよく気付いたと思う。それで、あの後、二人が現れたであろう場所を現地調査した。その結果がそれや」

はやてが二人に送ったデータには、瞬間的に張られた封時結界と強制転送魔法のログが記されていた。

それだけならば、珍しくはあるが取り上げて騒ぐ話でも、緘口令を敷く理由にはならない。

しかし…、

「残留魔力から推測される、術者の保有魔力…、SSS+って、  
こんなの有り得るの？」

「それでも、最低でもその程度の魔力を保有しとる人間が起こした、ってことになつとる。つまり、もしかしたらそれ以上の魔力をもつとる可能性もあるんや」

「そんな…」

なのはとフェイトは愕然とした表情を作った。

保有魔力とは、魔導師にとってどれほどの魔力を有しているかの規定を表す数値になっている。

下がF-から上がSSS+まで。六課でも一番高い魔力を保有しているはやてはSSSだ。

それでも、管理局全体からみても異常な数値だというのにさらに上のSSS+は長い歴史を誇る時空管理局でも歴代で三人しかおらず、その全ては故人になっている。

魔導師にとって魔力はガソリン。つまり、保有している魔力が多ければ多いほどに、より持久力を持ち、より強力な魔法を使えるということになる。

もしSSS+というのが本当ならば、管理局最強の魔導師になれるということだ。

「ほいで、次のページ開いてみ。もつと、凄いこと書いてあるで」

なのはとフェイトははやてに促されるまま、触媒を操作して次のページを開くと、二人の思考が停止した。

そこにはこう書かれていた。

———  
土地から検出された残留魔力、及び波形パターン、テレケ・アランのものと一致。それを断定する。

## ヨン話目

高町なのはの、ティレケ・アランに対する印象は非常に好意的なものだった。

五日前の深夜、突然フェイトが連れてきた血に濡れた幼子。水連を纏う鷹を金糸で象った見事な装飾が施された見たこともない民族衣装を身に纏い、瞑眠する赤毛の少女は、さながらお伽噺に出てくる眠り姫のように思えた。

触れば砕けてしまいそうな儂さと繊細さを内包した美しさを持ちながら、今は兄が大怪我をして落ち込んでいるものの小動物のような人懐っこい性格をしている。

管理局ではエリートとして、機動六課では隊長、そして新人を育成する教導隊としての責任の重い仕事を任されているのはにとつて、ティレケは癒しだった。

はやてのようにべたべた引っ付いたりはしないが、髪を撫でると猫のように目を細めて気持ちよさそうな顔をしているのを見ると、そのまま写真に撮って閉じ込めてしまいたいという感情にまで襲われる。次の給料日に一眼のデジタルカメラの購入すら考えている。今ならば、猫や犬に溺愛する飼い主の気持ちが嫌というほどに分かった。

そのティレケが、実はSSS+。自分を遥かに超える才能の持ち主だというのだ。

「待って、はやて。何かの間違いじゃない？そもそもティレケちゃんにリンカーコアはないよ」

なのはのすぐ隣にいるフェイトがはやての言うことを否定する意見を出した。しかし、その声は喉が張り付いたように乾いており動

揺れていることが手にとるように判った。

「せやな…、確かにティレケちゃんにはリンカーコアはない。最初の精密検査でそれは断定されとるし、みんなにそう報告した」

「だつたら…」

「ただ、ティレケちゃんが普段身につけてる“あるもの”を外すと突然リンカーコアが現れるんや」

はやての言葉になのはとフェイトは息を呑んだ。  
しかし、はやては二人の反応をあえて無視して言葉を続ける。

「気が付いたのはホントに偶然やった。一昨日、ティレケちゃんとお風呂に入った時にな、ティレケちゃんがいつも首にかけとる木彫りのアクセサリーあるやろ？それをつけたまんま入ろうとしたんですよ。」

流石に木製やから、湿度で傷んでまうつてことで外させたんやが…、その時に変な違和感を感じてな。そんな時は別に気にせえへんかったんやが…、」

木彫りのアクセサリー。

それはいつもティレケが隠すようにしながらも身につけている、ヤギを模したレリーフのことだ。

はやては、ティレケからそれを外した途端に、自分の胸の奥、リンカーコアがある部分が一瞬だけ指先でなぞられるような違和感を覚えた。

「あの時に、たまたまバスタオル持っていくのを忘れてたのに気が付いてな。ヴェータに持ってきてくれるように念話で頼んだんよ。したらな、“なんでいきなり独り言を言うの？”って言われたんや」

なのはとフェイトは言葉を失った。

念話とは言葉を介さずに自分の意思を相手に伝える魔法の一種であり、当然魔導師としての証であるリンカーコアがなければ念話を聞くことすらできない。

つまり、はやての念話を聞いた時点でティレケはリンカーコアを有していることになるのだ。

「流石におかしい思うてな、次の日にシャマルに頼んでもう一度リンカーコアの検査したんよ。だけど結果は前回と同じでリンカーコアの存在は確認できへんかった。せやけど、ティレケちゃんからアクセサリーを外した状態でもう一度検査したら…、見ての通りや」

空中に浮かぶディスプレイには、レントゲンのように透けた人間の心の臓にあたる部分に、はっきりと球状の影が映っていた。

それは、間違いなく魔導師のみが持つ疑似器官リンカーコアだ。

「それじゃあ、あの木彫りのアクセサリーがティレケちゃんのリンカーコアを隠していたってどういうの？」

「まだ詳しくは調べとらんから断言はできへんが、現状証拠としてはそうとしか考えられへん」

はやては少しバツが悪そうに眉をしかめた。

精密検査が終わった後に、直ぐにでもティレケのアクセサリーを解析しようとしたのだが、よほど大切なものなのかティレケは頑と

して渡そうとはしなかった。

そのせいで、レリーフを解析できないままなのだ。

「待って、それじゃあお兄さんの方は？お兄さんにはリンカーコアがあつたって言ってたけど」

なのは胸の奥にざわめくものを感じた。

ティレケがSSS+という膨大な魔力を有しているのならば、もしかしたら兄であるアトリも同じほどの魔力を有しているかもしれないという考えに思い当たったからだ。

なのはの言葉にはやては一層眉を寄せてしわを深くし、密やかに息をついた。

「お兄さんの方はな、AA+つてところや。一般の武装局員よりもやや魔力量が多いって程度なんやが…」

はやては苦しそうに表情を歪めると、窺うようにフェイトに視線を送った。

フェイトははやての視線に戸惑いを覚えたが、はやてはフェイトから視線を外して一呼吸置いてから、口を開いた。

「実はな、検査の結果お兄さんとティレケちゃんは血が繋がつたらんことが判つたんや。まあ、それだけやったら訳ありの兄妹つてことで強引やけど納得することはできる。せやけど、もっと面倒なことが判つたんや」

「まさか…、プロジェクトFATE？」

そこまで言われてフェイトははやてが何を言わんとしているか判

った。

—— プロジェクトFATE

運命の名を冠した、文字通り人の運命を作り出すクローニング技術のことだ。

それは人道的、道徳的観念から見て違法行為とされており、発覚した場合は厳重に処罰されるにも関わらず、秘密裏に研究が進められている犯罪の一つ。

一度は失った、大切なものを取り戻そうという者。人工的に優秀な魔導師を作り上げようという者。

それは禁忌という甘美な響きに誘われる者、そして人の手で人を作るという神にも似た行為に心を奪われる者が後を絶たない。

フェイト自身、プロジェクトFATEの被害者だった。

妄執という狂気にとらわれた、一人の科学者が作り上げた、娘のクローン。

それがフェイト・T・ハラオウンの出生だ。

もし、ティレケの兄がプロジェクトFATEによって生み出された者ならば、はやてが言いにくそうに口をばかすのも理解できた。

しかし、フェイトの考えとは裏腹にはやては首を横に振った。

「イヤ、多分プロジェクトFATEやらへん。もっとやばいもんや。シャマルが言うには、そもそもお兄さんは人間どころか生命体として有り得へんらしい」

その言葉にフェイトだけでなくのはも鈍器で殴られたかのような衝撃を受けた。

生命体として有り得ない。

それはいかなる意味を持って、生きているものの人権も道徳も、人道も全てを否定する言葉だった。

「ぶっちやけるとな、ティレケちゃんに関しては今日の本題のおまけや。本当の議題はティレケちゃんのお兄さんの話し…、簡潔に言うと、お兄ちゃんは今の管理局の推奨する魔法文化を根底から覆すかもしれない存在や」

はやてはそう言うと、自分の傍らに置いてあった紙での書類をなのはとフェイトに渡した。

恐らく、データーとしての媒体に残ることを恐れたのだろう。そしてそこには、はやての警戒に準じることが記されていた。

「…何…、これ？」

フェイトが掠れるような声を出した。実際に壊れた笛のようにその声は震えており動揺していることが目に見えて分かる。

「なんで…遺伝子が“三重螺旋構造”になってるの？」

四人しかいない、技術室に呟くようなフェイトの声は不思議と大きく響いた。

## GO話目

遺伝子はアデニン・シトシン・グアミン・チミンの四つの因子から構成され、二重螺旋を描く分子鎖が解かれ複製されることによってDNAが次世代へと複製される。

端的に言ってしまうえば、遺伝子とは始祖から子孫へ自然選択、または性選択によって確立された容姿を伝えるための情報の塊である。突然変異と言った特殊な例を除き、パズルのように複雑な遺伝情報はその寸分の狂いもなく伝えられ、種を残すために生物そのものが確立してきた不変なもの。

だからこそ、有り得ない。

五つ目の因子が織りなす、三重の螺旋など。

「その五つ目の因子に、どないな情報が書き込まれてるのかまでは判らんかったが、明らかに遺伝子操作で組み込まれたもんや。どうせロクなもんやないやろ」

はやては嫌悪の表情を隠しもせずに奥歯を噛みしめた。

「体の傷も酷いもんやった。火傷、刀傷、擦り傷、刺し傷…、銃痕もあつた。傷が治りきる前に新しい傷ができたんやろな。皮膚のほとんどの部分が腐つたりリンゴみたいな色に変色しとつたわ」

はやての言葉にフェイトは指先が冷たくなり、気持ちが悪く沈んでいき、記憶の沼に溺れそうになる。

「何かの研究の実験体として造られて、研究所から逃げ出してきたのかな…？それで追われた…とか」

窺うように聞いてくるなのは質問にはやては首を横に振った。

「わからん。目が覚めるまでは何とも言えへんが、それやと説明できへん部分があるのも確かや」

「テイレケちゃんのこと？」

テイレケに関しては膨大な魔力を有しているものの、人造魔導師としての可能性は極めて低いと送られてきたデータには書かれている。

つまり、もしアトリが研究所から逃げ出してきたのならば、テイレケと出会ったのは逃走の最中ということになる。

追われているにもかかわらず、子供という足手まといを連れていくことは自殺行為にも等しい悪手だ。

「それもあるんやけど…、お兄さんの持ったデバイスのことなんや…、この辺の説明はシャーリーにしてもらおう思うてな」

「はいはい」

つい今しがたまで部屋を漂っていた陰鬱とした空気を読まない、語尾に音符が付きそうなまでに能天気な声で返事をすると羽織っていた白衣のポケットから小さな楕円のアクセサリーを取り出し、なのはとフェイトに見えるようにディスクの上に置いた。

「これは？」

なのはとフェイトはディスクに置かれたアクセサリーを覗き込むように見た。

シルバーの薄い楕円のアクセサリーには向きあう双子の少年が描

かれており上の部分には紐が通せる穴があることからネックレスのトップだということが推測される。

「お兄さんの持っていたデバイスですよ。起動パスワードが判らないのでフェイトさんのバルディッシュの戦闘記録と待機状態で調べられるだけ調べたんですけど…、凄いですよこれは！」

シャーリーはいかにも興奮しているかのように声を上げると、手に持っていたリモコンを操作すると、壁に取り付けられた薄型のモニターから機械特有の鈍い駆動音が響き、画面はバルディッシュの戦闘記録から抜き出した五日前の夜の森の映像が映し出された。

テレケがフェイトの差し延ばされた手を取ろうとした瞬間、アトリが動き出しフェイトに切りかかるうとしてる場面でシャーリーは映像を一旦止めた。

「これを見てください。フェイト隊長のバルディッシュが展開した防護魔法。これ、破壊されたわけじゃなくて、お兄さんのデバイスが魔法を無効化してるんですよ！」

「無効化… A M Fみたいなもの？」

A M F…、アンチ・マギリング・フィールドと呼ばれる技術は範囲内の魔力結合を解いて魔法を無効化するフィールド魔法である。

効果範囲内では攻撃魔法だけでなく、移動魔法をも妨害するものだ。魔力結合を分解したというのならば、フェイトはあの時にあんなにも簡単に自分に凶刃が届いたことが納得できた。

しかし、腑に落ちないこともある。

もし、デバイスに A M F が組み込まれていたというのならば、確かに魔導師に対しては有効である。だが、同時に自分の魔法も使え

なくなることを意味しているのだ。

つまり、相手に枷をつけることはできるが同時に自分にもその枷をつけることになる。

デバイスを持つていたのだから、アトリは魔導師なのだろうが、魔導師ならば、魔法で戦った方が圧倒的に引き出しが多い。

自分で自分の行動を制限しているようなものだ。

フェイトが指を唇にあてて思考の奥へと沈みかけている表情を見て、シャーリーは得意気な笑みを作った。

「フッフッフ…、AMFなんてチャチなものじゃありませんよ。そもそも、AMFが分解できるのはAAAクラスの魔力までです。だけど、Sクラスのフェイト隊長の防護魔法を簡単に無効化したことから、AMFから更に発展したものだと考えられます。それに、これはバルディッシュのデータから判ったことなんですけど、魔力結合が無効化されているのはフェイト隊長の周囲だけ…、つまりこのデバイスの能力は任意の狭範囲の空間に一時的に魔力を無効化するフィールドを展開しているんですよ」

「それって…つまり…」

「まあ、極上の魔導師殺しつてわけです。下手なロストロギアより危険な代物ですよ」

フェイトは思わず息を呑んだ。

指先が震え、背筋に冷たい汗が流れるのを感じる。

狭範囲の空間を一時的に魔力を無効化する。

つまり、自分以外の周囲の魔導師を丸腰同然にできるといふこと

に等しい。

「そんな危険な技術…いつの間に…」

半ば茫然とした声でなのはが口を開いた。

それなりのショックを受けているようで、顔を青くして頬には一筋の汗が流れている。

それもそのはずだ。

そのような技術を次元犯罪者に使われたら、行われるのは一方的な虐殺だ。

魔導師である以上、手も足も出ない。

フェイトは思わず、自分が切られた頬を触れた。

ざらついた絆創膏の感触が指先を這う。

もしかしたら、あの時この程度の傷で済んだのはとんでもない幸運だったのではないかと改めて思った。

しかし、シャーリーはケロリとした顔で二人の予想の斜め上を行くことを言った。

「いえ、これは技術じゃなくてレアスキルの類だと思えますよ。転用される心配は皆無だと思ってください」

「…うん？」

「…え？」

なのはとフェイトはシャーリーの言葉に頓狂な声を上げた。

レアスキル？

いったい何を言っているのだろうか？

そんな二人を見て、腕を組んだまま黙っていたはやてが重そうに口を開いた。

「リンカーコアがな…、確認されたんよ。そのデバイスから」

二人は今度こそ声を失った。

## ? 話目

「なんか、驚きすぎて疲れた…」

「私毛…」

焦燥した覇気のない声で漏らしたフェイトの言葉になのはが賛同した。

二人は、椅子に腰をおろし疲れたように項垂れている。

「それにしても、SSS+ランクの魔力をもつティレケちゃんに有り得ない遺伝形体を持つお兄さん。それに加えてリンカーコアがあるデバイス…、確かに下手に報告したらどうなるか判ったもんじやないよね」

「…うん」

なのはははやてが緘口令を敷いた理由を痛いほどに理解した。

もし、上層部…、心ない人間にこのことを知られたら間違いない。ティレケは強制的に魔導師の養成所に送られ、兄のアトリは研究所へと連れて行かれるだろう。

特に、万年人手不足で頭を抱えている管理局にSSS+という規格外の魔力を有したティレケの存在を教えたら、管理局は本人の意思も関係なく保護と言い張り、入局させることが目に見えている。

正義を掲げる管理局と一枚岩ではない。

組織は巨大化すればするほどに、理想や思想が多岐にわたり派閥が生まれる。

三人の中でもはやては特別捜査官と言う役職に就いているために、管理局の裏の部分を目にする機会が多かった。

「まあ、正直得体のしれないもんを手元に置いてくつちゅー意味もあるんやけどね。それに、ティレケちゃんはともかくお兄さんの方は戦力になるかもしれん。恐らく相当の修羅場をくぐって来とるはずや…」

「私としては、ずっといてもらいたいぐらいですねー。一ヶ月や二月程度じゃこのデバイスの解析はできないでしょうし」

「まあ、後はお兄さんが起きるまで待つしかできないよね」

シャーリーのどこか冗談めいた口調を皮切りに空気は弛緩し始め、みんながいつものように穏やかな表情を取り戻し始めた。

既になのもフェイトも背中を這っていた冷たい汗も引き、体から力を抜いて普段の口調で話し始める。

「せやな。それでティレケちゃんとフェイトちゃんにはマジで土下座させたる」

「はやて…、それ、本気だったんだ…」

フェイトが呆れたようにちらりとはやての方を見ると、仕事の時の顔から下の表情に戻っており、ナイフのように鋭かった双眸はいつもの人懐っこそうな瞳になっていた。

「土下座はないけど…、“お話し”はしなきゃいけないよね…」

「なのはまで…」

ちなみに高町なのはの“お話し”は一方向的な肉体言語でのお話し

を意味することは有名な話である。

「お兄ちゃんも災難やなあ。起きた途端になのはちゃんの狩りに付き合わされんか…」

「にや！狩りつて…そんなことないの！！」

不本意だと言わんばかりに抗議するはやてはどこ吹く風というように飄々と笑いながら流し、フェイトとシャーリーは余りにも心当たりがありすぎたためになのはから目を逸らした。

「まあ、口はきける程度にしたってや。聞きかなあかんことは山程あるし、さつき話しとは別の件で聞きたいこともあるしな」

はやてが何気なく放った言葉になのはとフェイトは再び頬に緊張が走った。

つい先ほどまで、自分たちが持っていた常識をことごとく覆すような話しをしていたのだ。二人は次にどんな理不尽が語られるのか無意識のうちに身構えてしまっていた。

「まあ、ホントに個人的なもんなんやけどな…、お兄さんの持ち物で気になるのがもう一つあったんよ。それについて少しな…」

「気になるもの？」

おそろおそろ、探るようになのははやてに尋ねた。

眉間にしわを寄せながら、下唇に人差し指の第二関節をあてて考え込むような表情を作ると、はやてはふと顔を上げて、口を開いた。

「実はな…、」

そこまでいいかけて、突然はやての携帯端末が振動した。しかも、それは緊急時にしか使用されない回線からのもので、はやては慌てて応答すると宙に移るディスプレイにはどこか慌てた表情をしたシャマルの顔が映しだされた。

「どないしたんや？」

「あの…、ティレケちゃんのお兄さんが目を覚ましたんだけど…」

「ほんまか!？」

はやては余りのも驚き、状況を忘れて声を大きくした。

今まで目を覚まさなかつた人間がいきなり目を覚ましたのだ。当然の反応と言えばそうとも言える。

事実、なのはもフェイトも椅子から腰を浮かせて驚いていた。

「あの…、それでなんだけど…」

どこか言いにくそうに口を淀ませるシャマルにはやては眉を寄せた。

「何かあつたんか？」

明らかに挙動不審なシャマルにはやては尋ねると、自分を落ち着かせるために一拍置いてからシャマルは口を開いた。

「お兄さん…、私のこと知ってるみたいなの。夜天の書が闇の書だつてことも、私が騎士プログラムってことも…」

「なん…、やて…？」

まさか、という思いに体の芯が震えだし、はやては自分でも驚くような掠れた声が出た。

闇の書のこととは特秘事項になっている。

つまり、当時の関係者か、もしくは特秘事項を閲覧できる権限を持つ人間かのどちらかの可能性しかない。

しかし、ティレケの兄はどう考えてもそのどちらにも当てはまらない。

だとしたら情報の漏洩か…、

はやての頭の中では混乱と不信が目まぐるしく交錯していた。

「とりあえず早く来て。今はティレケちゃんがいるからある程度落ち着いてはいるけど、だいぶ混乱してるみたい。私よりははやてちゃんの方が口が回るからうまく説明できるし…」

「判った。直ぐに行くから待っててや」

はやては湧き上がる思考を無理やり遮断すると努めて冷静な声色で返事をして、動き出した。

## 菜々話目

君は僕との出会いを覚えているだろうか

あの時、君は笑っていた

柔らかな闇が包み込む夜の森で、嗤う三日月が作り出す天使の梯子に包まれる君に、僕は讚美歌を奏でる天使を見た

君の、あの微笑みは余りに清く、儂く、それでいて何よりも美しすぎた

そんな君が僕には怖かった

あの時の僕は既に屈辱に塗れ、穢れに塗れ、人であることをやめてしまっていた

挫折を知り、絶望を知り、何度も何度も心が折られ、名を捨て、自分の醜さと汚らしさを受け入れてしまっていた僕にとって、君は眩しすぎた

君が闇を照らす炎ならば、僕はそれに群がる蛾だ

闇に生きる身でありながら、光を求め、業火でその身が焼け、羽が焦げ、地に墮ちようと、地べたを這いずりなお、光を求めるそんな矮小な存在

君の清さはいずれ僕を破滅させる

そんな確信にも似たものを、君に見た

だけど、あの時の僕はまだ知らなかったんだ

君もまた、

穢れを隠し生きる、罪人であったことを

暗い、暗い暗闇の中で、腹の底から浮上していく感覚。

ああ、眠りが覚めるのだと朦朧とする意識の中でアトリ・アランはぼんやりと思った。

眠りから覚めるときは不思議なもので、どんなにも体が眠っていても意識だけが徐々に覚醒していき、自分が起きるといふ思考はできるのに、それ以外に何かを考えることはできない。

重い瞼をゆつくりと開くと、霞がかかる焦点が次第にはつきりとしたものになっていく。最初に見たのは、いかにも清潔そうな染み一つない白い天井だった。

「どじ…、だ…、じじ…」

アトリはふいに出した自分の声が驚くほどの掠れているのに気が

付いた。

意識すると喉が張り付いており、体を無理に起こすと関節が固まっておりポキポキと鳴り、自分が何日間も意識がなかったことを自覚した。

「お兄…ちゃん…？」

聞きなれた、幼い子供特有のメゾソプラノの声がアトリの耳に届いた。

そちらの方を見ると、目に透明な涙をいっぱい溜めたティレケが立っていた。

最後に見たときとは違う、黒いパーカーに七部の丈のデニムをはいており、まるで少年のような風貌をしている。

「ティレケ…？」

アトリが咳くようにティレケの名前を呼ぶと、ティレケは心のバランスが崩れたように顔をくしゃくしゃにして涙を流し、アトリの胸に飛び込んだ。

「お兄ちゃん…！」

「どわっ!？」

小さな弾丸と化したティレケはアトリをベッドに押し倒すとアトリの服を掴み、胸に顔をうずめてただただ体を小さく縮めて泣き続けた。

「よか…た…、もう…起きてくれないん…じゃないかって…、ずっと…、不安で…」

強がることもせず、胸が押しつぶされそうだった不安を喉に引っ掛かりながら話すティレケに対して、アトリは胸が裂けそうになった。

「ごめんな…心配掛けて…」

アトリは梳くようにティレケの髪を撫でながら言うと、ティレケは首を横に振った。

「ううん…、あり…がとう…、目を覚まして…くれて…。私を…一人に…しないでくれて…」

指の隙間に流れる癖のはいったティレケの髪は、絹のように心地がよく、しなやかだった。

しがみついた小さな体からはモクレンのよい匂いが香り、鼻孔をくすぐる。

そこで、始めてアトリは自分がどこにいるのか判らないことを思い出した。

「ティレケ…、ここは？」

アトリは自分の胸板に顔を押し付けて、唸るように泣くティレケに優しい口調で問いかけた。

少なくとも、意識を失う前に自分がいた次元世界ではあるまい。

そして、追手に捕まったわけでもないだろう。

もし捕まっていたならば、利用価値のない自分に用はないはずだ。それに、ティレケの血色や身だしなみを見れば、非常に好意的に接してもらっていることが伺えた。

「ミッドチルダの…、クラナガン…。時空管理局の、施設…」

「っ…！何だって！？」

アトリの穏やかだった心臓は一転して、痛いほどに暴れだし頭が熱くなった。

どういうことだ？

なんで管理局が自分を、ティレケを庇護した？

自分とティレケは、管理局にとって癌細胞の何物でもないというのに、生かしておく意味などどこにもない。

それほどまでに、自分たちは異端な存在だということをアトリは十分に理解していた。

アトリは自分に、落ち着くんだと言い聞かせながらも、背中に冷たい汗が流れるのを感じた。

「大丈夫だよ…。 “ここは” 大丈夫…。 私たちの知ってる、管理局じゃない…。 私たちを知ってる管理局じゃない…」

気が付けば、ティレケはアトリの胸から顔を上げて、下唇をギュツと噛みながら濡れた弱弱しい瞳でまっすぐとアトリを見つめていた。

「どういっ…」

「良かった！！目を覚ましたんですね！」

突然聞こえてきた嬉々とした声にアトリは視線をそちらにやると、そこには管理局の制服の上に白衣を羽織った金髪の女性がいた女性  
がいた。

アトリには、その女性に見覚えがあった。

だってそれは…、

「なんで…、なんで、お前がいるんだ…、湖の騎士…シヤマル！」

あんなにも、愛した人を護っていた騎士だったのだから。

## 蜂話目

はやては額に汗を浮かばせながら、入り組んだ機動六課隊舎の廊下を速足で歩いていった。

何とも始末の悪い感情がきりきりと、胸の痛みとともに渦巻いている。

はやての後ろにはなのはとフェイトもついてきており、三人が奏でる、床を叩く不規則なハイヒールの音がリノリウム張りの廊下に響かせる。三人とも顔の筋肉を強張らせており、無言のまま歩く姿はどこか異様で、すれ違う局員たちは怪訝な顔で振り返っていた。

三人はエレベーターを上がり、最後の角を曲がると医務室の前でなんとも形容しがたい表情で三人を待っていたシャルマルが立っていた。

「はやてちゃん……」

シャルマルははやてが来たことに気が付くと、パツと顔を上げた。まだ、俄かに混乱しているのだろう。顔色が青い。

「お兄さんとティレケちゃんは中か？」

「…ええ」

はやてはシャルマルに簡潔に尋ねると、シャルマルも必要最低限の応答だけをした。

体を僅かに震わせて、俯き加減のシャルマルを見て、はやては仕方ないと内心で思っていた。

夜天の書がまだ闇の書と呼ばれていと時の話は、シャルマルを始めとした騎士にとって黒歴史とも呼べるものだ。

今の主であるはやてに出会うまで、欲に塗れ、血に塗れ、罪で穢れ続けていたころのこと、例え自らが望んだものでなかったとしても、自分の手を汚してきたという事実だけは変わらない。

そしてそのことを得体のしれない少年が知っているという事実が胃の中に重たいものを落としていた。

はやては自動扉を開こうと、扉の前に立つために一歩踏み出そうとしたところでシャマルに口を開いた。

「はやてちゃん…あの人はきつと悪い人じゃない…。だけど…、気をつけてね…」

はやてに視線を合わせずに俯いたまま、シャマルは言った。はやてもシャマルに視線を絡ませずに一度だけ頷くと一歩踏み出す。

とりあえず、なのはとフェイトは部屋の前で待機だ。

扉の摩擦音を立てて開くと、はやての視線の先にはティレケを膝に乗せて、ベッドに座りはやてを見ている少年がいた。

嗅ぎなれているはずの部屋の壁に染みついた薬品の匂いが、この時はやたら鼻孔に突いた。

気が付けばはやては自分の手が微かに震えているのに気が付き、自分が緊張しているのだと知った。

「湖の騎士を見たときに、まさかとは思ってたけど…生きていたんだな。はやて…」

変性期を過ぎたばかりのアトリの声が部屋に響いた。

「僕は、お前が死んだときに守護プログラムの消滅も確認した…、  
いったいなんの冗談だ？」

湖のように深い緑色をした鋭い双眸がはやてを射抜いていた。

アトリは、はやてのことを知っているらしいが、はやてはアトリの  
ことなど知らないし、まして何の事を言っているのかまるで分らな  
かった。

「待ちい。何のことや？生きてただの、死んだだの…、そもそもな  
んで闇の書のことを知つとるんや？」

はやては自分の体が震えていることを悟られないようにさりげなく  
腕を組み、指に力を込めて鋭い視線を込めて言うと、アトリははや  
ての言葉に怪訝な表情を浮かべて首を傾げた。

「一回死んで記憶が飛んだの？確かに、頭は半分吹き飛ばされてた  
けど…」

「ちょい待ち、マジで待ちい！何やその物騒な話しは！？」

アトリははやての反応にますます眉間のしわを深めた。

膝の上にいるティレケは、状況が呑みこめないのかキョトンとし  
た表情をしている。

「なんかお互いの情報に齟齬があるみたいやな。ちよいと落ち着い  
て話し合おか？」

「イヤ…、テンパツてるのってはやてだけだろ…？」

「上げ足はええ！」

はやての声にティレケはビクリと体を強張らせ、つい声を荒げてしまったはやては微かな罪悪感を胸に覚えながら、アトリと視線を絡ませた。

「聞きたいことは山ほどある。とりあえず着替えてからでええから話を聞かせてもらおうか…」

はやてから送られるナイフのような視線に、怪訝な表情を崩さないまま

「なんか雰囲気変わったか…？というか、君は本当に八神はやてなのか？」

「ここ数年、特にキャラの変化はあらへん…、それに、お兄ちゃんはそのこと知っとるみたいやけど、私にとっては会うのも話すのも始めてやで」

はやてのその言葉に、アトリは未知に遭遇したたかのように、ますます困惑の表情を浮かべた。

それにつられて、はやても困惑してしまう。むしろ、ここまで本気で訝しがられたら、自分の方が間違いなのではないかと疑ってしまうほどに、アトリの表情は混乱しているように見えた。

「はやてちゃん…、大丈夫…？」

はやてが背にしていた扉が開き、窺うようになるのはとフェイトが覗き込んでいた。

中々、出てこないことや時折はやての荒げた声が聞こえてきて心配

になったのだろう。二人とも、緊張したように表情を強張らせていた。

「ん…、まあ大丈夫やで…」

はやては自分を心配して様子を見に来てくれた親友に礼を言つと、アトリの表情が変わっているのに気が付いた。

先ほどまでは怪訝に眉を寄せていたのに、今は目を丸くして、まるで幽霊を見るかのような表情でなのはとフェイトを見た。

「…ホントに…何の冗談なんだ？」

呟くように発したアトリの声に、なのはとフェイトは突然向けられた有り得ないものを見たというような視線に戸惑った。

「どうして君たち三人が一緒にいるんだ…、高町なのは…」

「え？」

何の脈絡もなく、突然名前を呼ばれたのはは頓狂な表情を作った。確かに、なのはとフェイトは管理局のイメージビデオなどにも多く出演しているため、下手なアイドルよりも知名度が高い。

だから、名前を知られていてもおかしくはないのだが、アトリが挙げたもう一人の名前は、既にこの世にいない人間の名だった。

「…アリシア・テストロッサ！」

「なっ…!!」

アトリの言葉に三人は正面から刃で切りつけられたような気がした。

「君たちは…、敵同士じゃなかったのか…？」

まるでその場の空気が凍りついたかのように時間だけが止まった。

## 〇話目

君と過ごした時間はあたたかな夢のようだった

淡い月の光に満たされた二人きりの部屋で、僕らは何をするでもなくただ身を寄せ合い僕に体重を預ける君は、世間知らずで穢れを知らないかと思えば、ふとしたきっかけで頬を赤くして俯くこともあった

そんな君があまりにも可愛らしくて、僕は君と距離を取りたいのに、君は僕の気持なんかそしらぬように僕との距離を縮めて、最後には僕の心さへも奪ってしまった

君と共にいるという恐怖はいつしかなくなり、気が付けば君を失う恐怖へと変わっていた

僕は君といることで、自らの穢れを君の光で霞ませようとしていたんだ

君といたかった

君が欲しかった

君と共に歩み続けたかった

だけど、君の潔癖さと孤高の心は

唐突にそして凜然に僕たちの時間を終わらせた

彼方へ

彼方へ

僕は君と、君と二人で

誰も知らない遠くへと行きたかったんだ

機動六課の部隊長室には今までにない、触れば切れてしまいそうな刃物のような空気に満たされていた。

部屋の中にある来賓用のソファーに座っているのはアトリ、向かい合って左からフェイト、はやて、なのはの順に腰をかけている。

そしてその後ろには、はやての騎士であるヴォルケンリッターがいた。

なぜか、ティレケはフェイトの膝の上にいる。

あの後、アトリは着替えを渡されはやてたちに促されるまま部隊長室に通された。

アトリが今着ているのは、ヴァイスがティレケの服を買う時についでに買った、無地の白いTシャツと黒いジャージだ。半袖の先から見える傷跡や、首筋、顔に至るまで、肌に見える部分全てに刻まれた傷跡が生々しく痛ましく見えた。

部屋にはすでに、ヴォルケンリッターが待機しており、シャマルから話を聞いたのか疑念と殺意が混じりあったような視線をアトリに

送っていた。

「単刀直入に聞く…君は何者や…？」

テーブルの上に置かれたコーヒーを一口飲み、ソーサの上に置くとはやては口を開いた。

はやてたちの後ろから送られる殺気じみた視線を浴びながらも、飄々とした感じにコーヒーに砂糖とミルクを入れてマドラーで掻きまわしていた手を止めるとはやてに視線を絡ませる。

その目を見てはやてだけでなくフェイトもなのはもドキリとした。

深い緑の瞳は、湖畔の底を思わせるほどに澄んでいて、綺麗なのに、その中には感情と言えるようなものはなかった。

言うなれば、伽藍。

何を考えているか判らない、空っぽの瞳だった。

「…アトリ・アラン、十七歳。身長、体重は最近測る暇がなかったから知らない。出身は第97管理外世界地球。ユーラシア大陸で遊牧民をしていた一族の出だ」

「そういうこと聞いとるんちゃう。君のデバイスや、体のことや…、後ティレケちゃんのことも聞きたいしな…」

いきなり名前を上げられたティレケはフェイトの膝の上で飲んでいったオレンジジュースのストローから口を外してキョトンとした表情を作った。

それを見たアトリは、不機嫌そうに眉をしかめるとはやてに念話を飛ばした。

『ティレケを席から外して欲しい。というか、なんでティレケまでこの席に呼んだ？』

『目が覚めたばかりのお兄ちゃんと一緒にいた方がええかな、という心遣いからや。ティレケちゃんを外の出したら質問に答えてくれるんか？』

『…答えられる範囲ならば』

はやては部屋の隅に立っていたシャマルに視線を送ると、シャマルは頷いてティレケの前まで歩き視線を同じにした。

「ティレケちゃん、お姉さんと一緒にお外に行きましようか？」

柔和な微笑みでティレケに問いかけると、ティレケは困ったようにアトリとフェイトの顔を見比べた。

「大丈夫だティレケ。行っておいで」

「…うん」

アトリが後押しすると、逡巡しながらも手にしていたコップをテーブルの上に置きフェイトの膝から降り、シャマルの手を取った。

部隊長室の扉から出て行こうとした時に、ティレケはもう一度、捨てられた子犬のような潤んだ目をしながらアトリの方を見ると、アトリは微笑みながら首を頷けた。つい数瞬前まで伽藍のように空っぽだった瞳には慈愛とも呼べる温かな何かが満ちている。

それを見ただけで、アトリはティレケのことを心の底から大事にしているということが部屋にいる全員が理解できた。

僅かな動作で意思の疎通ができたのか、ティレケの顔から不安の色が抜けて、シャマルに手を引かれながら部屋を後にした。

「…随分と懐かれたもんだな、アリシア」

視線をフェイトに移しながら、アトリにアリシアと呼ばれたフェイトは顔を青くして体を強張らせた。

なぜ、この少年はアリシアの名を知っているのだろつという疑念と共に、過去のトラウマが蘇り記憶の沼へと引きずり込まれそうになる。

「違つよ。」

凜としたなのは声が部屋に響いた。

「この子の名前はフェイトちゃん。アリシアって名前じゃないよ」

なのはにしては珍しく、不機嫌を隠そうともしない表情で言うアトリは一瞬だけ目を見開いて謝罪した。

「そうか…、それは失礼。知り合いに余りにも似ていたものでね…、だけど八神はやてと、高町なのは…、二人の名前には相違がないかな？」

アトリの質問に二人は声を出さずにただ頷いた。

「後ろに居るのは、ヴォルケンリッターでいいんだよね？」

返事の代りに、無言のプレッシャーが返ってきた。

その視線には、猜疑と警戒心、そして僅かばかりの恐怖が入り混じったものだ。

しかし、アトリは顔色一つ変えずに口を開く。

「僕とティレケの体を調べたか…、当然と言えば当然だけど…、僕もまだ混乱しているんだ。申し訳ないけど、そちらの質問に答える前に僕から質問してもいいかな？」

「まあ、ええやる。ただし、その後にごっこの質問に全部答えてもらうのが条件や」

はやてはアトリに視線を絡めたまま、アトリの僅かな表情の変化を見逃さないように鋭い双眸で答えた。

しかし、アトリの瞳は先ほどティレケに向けた温かなものは消え失せ、表情の見えない元の伽藍の瞳に戻っていた。

「ありがとう。僕が聞きたいのは、第二次次元界大戦、マアト、アリシア・テスタロッサ、プレシア・テスタロッサ、プロジェクト・アダム…、どれか一つでも聞き覚えのあるものは？最後に今は新暦何年だ？」

アトリの言った単語に誰もが顔をしかめた。はやては眉根を寄せながらも、アトリの質問に答える

「プレシア・テスタロッサは十年前に第97管理外世界でPT事件という事件を引き起こした犯人や。アリシア・テスタロッサはその娘。二人とも既に死亡扱いになつとる。それから次元大戦なんて、ミッドチルダとベルカの第一次以降起きとらん。アダムについてはティレケちゃんが口をこぼした程度しか知らんし、マアトはエジプトの神様やる？何の関係があるんや？ほんで最後の質問やけど、今は新暦0075年や」

はやての返答を聞いたアトリは、胃の腑を鷲掴みにされたような

不快感を覚えた。

類には冷たい汗が流れ、今の自分の置かれた状況を頭の冷静な部分が必要になつて理解しようとしている。

「最後にもう一つだけいい?...、僕は今、一体どこにいるんだ？」

「第一管理世界ミッドチルダの首都クラナガン。時空管理局機動六課の敷地内や」

それを聞いたアトリは野兎色をした頭を抱えて俯いてしまう。

「これは...、本当に何の冗談なんだ...？」

掠れるような声を絞り出す、アトリに部屋にいる誰もが困惑していた。

今までの会話のどこにも、アトリを追い詰めるようなものはなかったはずだ。

しかし今、アトリは地図を失くし、方角を見失った旅人のように混乱している。

そのままの体勢でしばらくすると、落ち着いたのかアトリは顔を上げて、絞り出すような声でポツリポツリと言葉を紡いだ。

「...、僕がいた場所は新暦0073年、時空管理局が...、地上と海で別れて戦争をしていた世界だ...、」

「我々を馬鹿にしているのか？そんな話し信じられないだろっ」

部屋の隅で壁に背を預けて腕を組みながら静聴していたシグナム

が怒りを滲ませたような口調で口を開いた。

「まったくだ。荒唐無稽もいいところだな。作り話ならばもっとましなものを考えるべきだ」

シグナムに同調して、床に座っていたオオカミ形態のザフィーラもアトリを非難するように言う。

しかし、そんな二人にはやてはピシヤリと言いつた。

「シグナム、ザフィーラは口を挟まんといて。人の話は最後まで聞くもんや」

「しかし、主はやて…」

「シグナム、私に同じことを二回も言わせる気か？」

はやての強い口調にシグナムとザフィーラは押し黙ってしまふ。

そのまま、はやては後ろに二人に視線を送りもせずアトリに続きを話すように促した。

「聖王教会は地上側について、全次元世界を巻き込んだ大戦になった…。マアトはそんな管理局を見限って新たに発足したレジスタンス組織だ…。リーダーはプレシア・テストロッサとアリシア・テストロッサの親子…。僕はマアトに所属していた…」

そこで、プレシアとアリシアの名前が出てきたことにフェイトはギョツとした表情をしたが、アトリはそれを一瞥しただけで話しを続けた。

「その時、八神はやては教会…、地上側についていた。そして、高町なのは空…、つまり敵同士だ…。戦争は結局空が勝ち、マトと地上、そして教会の残党は徹底的に潰され、僕とティレケはそれから逃げている最中だった…」

「…、アダム・プロジェクトは？」

黙って聞いていたはやては静かな口調でアトリに聞くと、アトリは一度言いづらそうに口を淀ませながらも、説明をした。

「…後天的に遺伝子を弄って優秀な魔導師を造る技術だ。僕はそのプロトタイプ…、一番最初に製造されたアダムシリーズだ」

その言葉に誰もが目を見開いた。

アトリは自分を既に生まれた人間を造り変える技術の試作品だと言った。それは人造魔導師や線的に機械に順応できる体を造るプロジェクト・フェイトや戦闘機人計画よりも遥かに先進的で、非人道的な技術だ。

この時、はやては上に報告することを保留していた判断を心の底から正しいものだったと安堵した。

もしも、上層部がアトリの存在を知ったならば間違いなくティレケと引き離されてどこかの研究所でモルモットにされていただろう。ただでさえ、心に傷を負っているティレケの手前そうだった事態だけは絶対に避けたかったのだ。

「ティレケちゃんも、プロジェクト・アダムの被験者なんか…？」

はやては努めて冷静な声で尋ねるとアトリは首を横に振った。

「ティレケは違う…。あの子は僕が逃亡している最中に偶然出会ったんだ…。もう知っているとはい思いますが、ティレケには魔導師の素養がある。戦争で多くの人材が失われた空にとって、ティレケは喉から手が出るほどの存在だったんだ…」

アトリはそこで一旦言葉を切ると、その表情には影が射しているのと同時に、怒りが滲んでいた。

はやてもなのはも、フェイトもそんなアトリを見て身を強張らせながら言葉を待った。

「空の連中は…、ティレケを引き渡すことを拒んだ家族を皆殺しにして攫おうとしていた…」

「…そんな！」

「酷い…」

顔を青くして悲痛声を上げるフェイトと、唇を震わせながら掠れる声を出したなのはの瞳は揺れていた。

自分たちの所属する組織が、あまりにも非人道的な行為を行ったことと、ティレケがそんなにも悲惨な過去を持っていたことに動揺したのだ。

「僕はたまたま現場に居合わせて、家族は手遅れだったけどティレケだけを助けることができた…。一人になったティレケが余りに哀れで放っておくことができなかった。だから危険を承知でティレケを連れていった…」

はやてはアトリの独白に一度だけ頷くと、胸のポケットからアトリのデバイスを取り出してテーブルの上に置いた。

「…、最後の質問や。お兄さんのもつとるデバイス…、これについて詳しく教えてもろうてもええか？」

アトリはテーブルに置かれた自分のデバイスに目を落とすと、申し訳なさそうに言った。

「このデバイスの名前はカストル。アームドデバイスだ。ただ、申し訳ないけど、僕もカストルについては詳しく知らないんだ。師の形見で、僕が受け継いだ。重要なことは何も聞いていない…」

「そか…、それは残念や…。まあ、とりあえずこれは返しとくわ」

「いいのか？」

「持ち主に返すのは当然やろ？それにお師匠さんの形見言うてんたやんか。大事にせなあかんよ」

「…ありがとう」

はやてはテーブルの上におかれたカストルをを指で滑らせてアトリに渡すと、アトリは大事そうに指先で持ち上げてポケットにしまった。

「さて…、お兄さんとテレケちゃんの身の上も判ったことやし…、こっからは提案なんやけど、お兄さん機動六課で働いてみいへん？」

「…はい？」

「主はやて!？」

「はやて!いきなりなにをいいだすんだよ!？」

アトリがはやての突然の提案に頓狂な表情をつくると同時に、シグナムとヴェータが声を荒げた。

その反応は当然と言えるものだ。

自分たちの正体を知ってなおかつ、未だ得体のしれないものを自分の懐に入れようとはやては言いだしたのだ。

はやての両隣りにいるのはとフェイトも呆気にとられた表情をしている。

しかし、はやては二人の声を無視してアトリに視線を絡ませて言葉が続けた。

「悪い話じゃないはずやで。お兄さんの話だと、帰る場所も居場所もあらへんのやろ?だったらここで面倒見たる。もちろん仕事をしてもろうけどな」

「…、あのさ、僕の話し信じるの?自分で言つのもアレだけど、だいぶ荒唐無稽な話だと思っよ?」

眉間に寄せたしわを指先でつまみながら言うアトリに、はやては笑顔で答えた。

「お兄さんが嘘ついたらんことぐらいは判るわ。ティレケちゃんを見れば悪い人でもないこともな。それに、さっきの話には物証もあるやろ?」

「物証?」

フェイトがはやての言葉に首をかしげると、はやてはよく言ってくれたと言わんばかりの表情を造って、ボロボロのアクセサリーを取り出した。

元は剣十時のアームデバイスだったのだろうが、十字の左の部分が欠けコアもひび割れている。

「これは？」

フェイトがマジマジとはやてのとりだした剣十時を見ながら問うと、はやてはどこか不敵そうな笑みをつくって答えを言った。

「これはな、私のシュベルトクロイツや」

・話目

どくん。

アトリは心臓が大きく脈打った。

はやてが不敵な笑みで取り出したものは、シュベルトクローイツ。  
アトリがいた世界のはやてが託した約束の証。

そして、アトリの罪の証だった。

アトリの脳裏に浮かんだのは遠くの空を見つめるような目つきで  
戦場を見るはやての横顔。

めったに笑わない彼女が見せた、すみれのように柔らかく儂げな笑  
顔。

そして、

何も見ていない虚ろな目で、息絶えた

頭が半分吹き飛ばされた血まみれの彼女――

「…お兄さん？」

心配そうなのはの声にアトリは記憶の海から引っ張り戻された。

「顔色悪いけど大丈夫？」

「…イヤ、大丈夫だ…」

迂闊だった。

もう二度と会えないと思っていた彼女が…、一度は失った彼女が自分に託したシュベルトクロイツを持って目の前にいる。

まだ、戦争が始まる前の彼女に…、居なくなっただけははずのはやてが自分の前に戻ってきたのだと錯覚してしまっていた。

アトリは小さく深呼吸をして心臓の動悸を鎮めて、頭を冷静にする。

呑みこまれるな。

目の前にいる八神はやても、高町なのはも、自分の知っている彼女たちではない。

彼女たちは…、八神はやても、高町なのはも、そしてアリシア・テストロツサも、あの戦争の中で既に命を落としているのだから…、

「シャーリーに最初に言われた時は、どんな超常現象や！って思ったんやけどな。まあ、お兄さんの存在自体も超常現象みたいなもんやったけど…。同じものが同時に存在するなんて有り得へんやろ。これが何よりの証拠や」

「さっき言ってた気になるものって、これのことだったの？」

「せや。最初は模造品なんかかかと思ったんやけど、手に持つと違和感を感じるくらいにしっくりときてな。シャーリーに頼んで分

析してもらうたら、素材、分子構成に一致する部分が多かったうえに私が使用した魔力残滓まで残つとったわ。ちなみに私のシュベルトはここにちゃんとおるで」

フェイトの問いかけにはやては答えると、自分のシュベルトクロイツを取り出して、アトリが持っていたというその隣に並べた。

なのはやフェイトだけでなく、はやてもまた管理局内で高い才能を持ちながら非常に整った容姿をしているために管理局の広報によく起用される。

そのせいで、三人の持っているデバイスも有名なものとなり、クラナガンのデパートの玩具売場でも普通に見られるほどにその形状を模した模造品が多く流通している。

しかし、こうして並べてみるとアトリの所持していたシュベルトは、ボロボロになっていることを除けば、酷似しているを通り越してまったく同じものにしか見えなかった。

「これはもう、私以外にもう一人私がおつたとしか考えられへんやろ？お兄さんの話しやと、全部辻褃が合う」

「だからって、僕の話信じるのか？正直、僕みたいな得体のしれない人間を懐に入れるのは危険以外のなにものでもないと思うよ？」

「まあ、ぶっちゃけると監視の意味合いもあるけどな。それにホントに危険な人間は自分からそないなこと言わへんやろ？それにな……」

そこまでいいかけて、次の言葉を溜めるはやてに部屋に緊張が張

り詰めた。

はやての真意をはかっているのだろう。

ナイフのように鋭いはやての視線に、アトリは獲物を見据える猛禽類のような目つきで視線を絡ませる。

今までも、こうした交渉の場に立ったことはあった。

その積まれた経験から、これからはやての言う言葉が本当の理由だということをアトリは肌で感じ取っていた。

誰もが息を呑むような空気の中で、はやては口を開いた。

「まだティレケちゃんを着せ替えして遊んでへん！！」

「……………、は？」

今のがだれの声だかわからない。

しかし、部屋にいる誰もが呆気にとられた同じ表情をしていた。

「もうティレケちゃんように何着も服を造ったんや！可愛ええフリフリのやつ！！ヴィータとキャロとのコラボを企画して、後はなのはちゃんがデジカメを買うのを待つだけやったのに…、ここでお兄さんにいなくなったらティレケちゃんもいなくなってまうやろー！！」

「な、なんで私がカメラ買おうとしてたこと知ってるの！？」

「ちよつと待てはやて！あたしとコラボってなんだそれ！？あたしは絶対にやらないぞー！！」

「なのはちゃんはディスクの上にカメラのパンフ置きっぱなしやったる！なのはちゃんの普段の視線を見とれば何を記録に残そうか

思つとつたかは直ぐに判るわ！！それからヴィータには拒否権はあらへん！！」

今までの張り詰めた緊張が嘘のように一瞬で霧散して、なのはと後ろに控えていたヴィータが喚きだした。

フェイトは苦笑いをして、シグナムはしわを寄せた眉根に指を押えて呆れたような顔をしている。

「今までのロリ担当はヴィータとキャロだけやった！そこにティレケちゃんという強力な兵器が加わったんや！！子供の成長は早い！“今”なんてあつという間に過ぎてまう！私らはそれを記録できる立場にあるんやで！？そう！特にティレケちゃんみたいに可愛ええ子の記録を残さんことは死罪にも値する罪や！！」

「だからつて何でそこにあたしも入るんだよ！？」

「待つて！私いいこと思いついた！それ六課のイベントにしちやつてカメラ代経費で落とそうよ！！」

「高町！？」

気が付けば、そこにいる誰もが仕事の表情はなくなり友達と話しているような年相応の少女のものになっていた。

顔を赤くしてはやてに食って掛かるヴィータ。それに便乗するなのは。

その光景が余りにもおかしくて、アトリが無意識のうちに声を出して笑っていた。

「クツ、ハハハツハハハツハハ」

突然笑い出したアトリに誰もが視線を向けた。

その表情は今までの感情の読めないものとは違い、年相応の少年のものだった。

「イヤ、失礼。そういえばお礼がまだだったって思ってさ。僕が眠っている間にティレケの面倒を見てくれてありがとう。あんなに僕以外の人に懐いているティレケを見るのは初めてだった。本当に大事にしてくれていたんだな……」

目尻に涙を浮かべながら笑いをかみ殺して礼を言うアトリを見て、その表情がどこか眩しくて、始めて会った時とのギャップが余りにも激しすぎてフェイトはドキリとした。

そして思った。

——この人のこと好きになりそうと

始めて言葉を交わす人にも関わらず、どういつ訳か言葉にできない感情がフェイトの中に染み込んでいった。

「あ…、あの。そんなお礼を言われる様な事、私たちは特にしていませんから…。それにティレケちゃんも懐いてるっていうよりも寂しいから一緒にいるって感じで……」

頬を赤らめながら答えるフェイトにアトリは曖昧に笑った。

「それは違うよ。ティレケは人に優しくされるのに慣れてないか

らどう甘えていいのか判つてないだけなんだ。普段だつたら人に触られるのも嫌がるあの子が君の膝の上におとなしく座っているのを見たときは本当に驚いたよ」

「ま、私らの人徳やな。」

ものすごくいい笑顔でグーサインを出すはやてにアトリは完全に警戒を解いた。

ここに来たのはもしかしたらとんでもない幸運だったのかもしれない。

「さっきの話し…、一つだけお願いがあるんだけど、聞いてもらってもいいかな？」

「ま、聞くだけ聞いたろ。判断はこちらに任せてもらっけどな」

はやての言葉に、アトリは一度緩んだ顔を引きもどして口を開いた。

「ティレケのことだ。あの子に魔法を教えるのはやめてほしい」

「…、理由を聞いてもええか？」

はやても再び顔を引きもどしてアトリに理由を尋ねた。

「ティレケは自分が魔力を持っていることを知らない。もう気付いてると思うから暴露するけど、ティレケが首から下げているレリーフ。あれは魔力を無限に食らい続けるアルゲディっていうロストロギアを僕が改造したものなんだ」

「…！ロストロギアやて！？」

はやては思わず声を荒げた。

ロストロギアの改造。そんなことが可能なのかと。

それははやてだけでなく部屋にいる誰もが驚愕していた。

しかし、アトリはそれをあえて無視して言葉を続ける。

「ティレケは自分の本当の家族が殺されて理由をまだ知らないんだ。それが、自分の持っている魔力が原因だって知ってしまったら…、最悪壊れる…。もっと成長してから、時期を見て話したいんだ」

愁いを帯びたアトリの目に、はやてはアトリは本当にティレケを大事にしているのだということを感じた。

それと同時にアトリの意見に激しく同意した。

ティレケの心根は優しい。そして、あんなにも年端の行かない少女に家族が殺されたのは自分が原因だという残酷な事実を突き付けたら、間違いなく生涯消えない傷になる。

「そのことだけを約束してくれるのであれば、僕と言う戦力を君たちに提供しよう」

まっすぐと射抜くアトリの視線に、はやては嘘偽りがないと判断した。

「ロストロギアについてはまた後で詳しく聞くけど、ティレケちゃんについては私も賛成やわ。あないな子供にそないな残酷な事実、

耐えられへんやろな…」

「…ありがとう」

はやては、アトリがどこか安堵したような笑みを造るのを見ると右手を差し出した。

「交渉成立や。これからよろしくなアトリ君。私の呼び方ははやてのままであええからな」

呼び方がお兄さんから名前に変わったことに少々戸惑いを感じながらもアトリははやての手を取ろうとした。

「こちらこそよろしく。はやて」

指先と指先が触れ合おうとした瞬間、凜然としたシグナムの音が部屋に響いた。

「待て。その手を取る前に私と模擬戦をしてみらおう」

## 巻末話目

アトリはシグナムの言葉に一度差し出した手をひっこめた。

一度柔らかく弛緩した空気は、再び引き締まりアトリは吟味するような視線をシグナムに送る。

「腕に覚えがあるのならば、まず私と戦って実力のほどを測ってからその手を取っても遅くはないだろう。戦力として迎えていざという時に使えませんでしたじゃ話しにならない」

ようやくまとまりかけた話しに横やりをられたことが気に食わないのか、仮借ない態度で滔々と話すシグナムにはやては顔をしかめていた。

「シグナム。アトリ君は病みあがりなんやで？体が万全になつてからでも遅くないやろ？」

「イヤ、烈火の将の言うとおり、先に僕の戦力を知ってもらうのが妥当だ」

「でも…、大丈夫なんですか？」

さも、当然のように言い放つアトリにフェイトは心配そうに尋ねると、アトリは仕方なさそうに笑いながら肩をすくめた。

「戦場じゃあ、自分のコンディションなんて犬のエサにすらならない言い訳だよ。それに前にも腹に穴を空けられた状態で戦ったこともある。それに比べたら、今の僕の状態は良好な方だ」

「そ…、そうなんだ…」

何でもないようにさらりと言った凄惨な過去にフェイトだけでなくシグナムを除いた誰もが顔を青くして異邦人を見るようにアトリを見た。

しかし、なのはだけは、自分がかつて墜ちた過去のトラウマが蘇り、正面から刃で切りつけられたような感覚と同時に、不謹慎だと思いつつもアトリも墜ちたことがあるのだという事実には親近感が沸いた。

「話しは決まったな。ならば十分後にこの下にある演習所に来い。私は先に行っている」

シグナムはそう簡潔に言うと、鋭い目つきのまま部隊長室から出て行った。

扉が閉まり、踵を踏みならず足音が部屋から遠ざかるのを確認するとはやては口を開いた。

「ごめんなあ、アトリ君…。シグナムは普段はあんなやないんやけど…」

先ほどまでのシグナムの視線はいつものものではなく、削った氷のような不機嫌さでアトリを射抜いていた。

侮蔑と警戒が混じりあった、まるで犯罪者を見るような目つき。

言葉を交わすのは初めてのはずなのに、隠そうとしても滲み出る、野生の獣のようなキラキラとした微かな殺気にアトリは気付いていた。

そして、主であるはやてもそうだ。  
どこか困惑したように、申し訳なさそうな顔でアトリの顔をチラチラと見ていた。

「まあ、虫の居所が悪いこともあるさ。それよか、僕のシュベルト返してもらってもいいかな？」

「ん？ああ、どうぞ」

アトリの要望にはやては細い指先で金の剣十字を取ると、差し出された掌に乗せると、アトリは哀愁の色を瞳に乗せた。

「なあ、アトリ君…、私のシュベルトを持つと…たつてことはアトリ君の居た世界では私とアトリ君は知り合いだったんやろ？どないな関係やつたんや？」

アトリの微妙な表情の変化にはやては気が付き尋ねた。

そのことはずっと気になっていたことだった。

恐らく、次元世界とは違う並行世界と思われるような場所から来た少年。アトリがはやてのシュベルトクロイツを大事そうに持っていたことから、決して顔見知り程度の知り合いではなかったということが推測される。

自分の知らない世界にいたもう一人の自分。

それを知っているアトリにはやては軽い好奇心で聞いたのだ。

「…そうだな…はやてと僕の関係は言葉では簡単に言えるようなものじゃなかった気がするけど…、幼馴染ってというのが一番しっくりとくる気がする」

アトリは過去を回顧するように俯きがちに目を伏せて、口の端だけを微かに釣り上げてどこか悲しそうな笑みを作った。

「子供のころから一緒に飯食って、一緒に寝て、一緒に同じ時間を過ごした…、体の一部みたいなもんだった。あいつも同じようなことを言っていたよ…」

思うと合縁奇縁だなとアトリは思った。

はやてと道を離れた、はやてを見捨てた、はやての最期を看取った、はやての想いを裏切ってしまった。

だけど、今も目の前に自分の知らないはやてがいる。

それが、罰なのか救いなのかは分からない。

しかし、はやての顔を見ていると砂時計のように零れ落ちた時間の中に取り残さぬように胸に刻んだ、彼女との輝かしい思い出が悲鳴を上げて心臓を締め上げてくる。

自分の目の前にいるはやてと、自分の知っているはやては違うのだ。

頭の冷静な部分が何度もそう言い聞かせても、心のどこかで彼女が戻ってきたと歓喜している自分がある。

アトリはそれが情けなくしょうがなかった。

「アトリ君？」

アトリの僅かな表情の変化に気が付いたのか、はやては心配な声を出すと、アトリは自分の感傷を払うかのように頭を横に振って、椅子から立った。

「そろそろ演習所とやらに案内して欲しいな。余り烈火の将を待たせるわけにもいかないし」

「ん、ついてき」

はやても何かを感じ取ったのだろう。それ以上アトリに言及することなくアトリの言葉に素直に反応して、席を立った。それにつられて、両隣りに腰を座っていたのはとフェイトも腰を上げてアトリにこちらに来るように促すとアトリはそれに従って部屋を出た。

まだ建設されてから間もない隊舎の廊下は目立った汚れはなく、染みなど一つもない蛍光灯に反射して目が痛くなるほどの白になった廊下を歩いて行った。

感傷的になるな。

今自分が守らなければならないのは、過去のはやてでも、今はやてでもない。

ましてや、アリシアでもマアトでもない。

ティレケ一人だ。

ここには自分もティレケを知る人間は誰もいない。

そして、幸いにもこの人間はまだティレケの本当の秘密にも気が付いていない。

ならば、やり直せる。

染みこんだ穢れは落ちることは生涯ないだろう。ならば塗り替えれ

ばいいのだ。

この廊下のように白く、一切の穢れなどないように振る舞えばいい。汚い所を全て隠してしまえばいい。

そうして、ティレケを守ろう。

ティレケを救おう。

ティレケを幸せにしよう。

そうすることで

自分の罪は初めて完成するのだから――

ティレケは昼食の Pasta を食べると直ぐに眠ってしまった。

シャマルの膝に頭を預けながら体を丸めて眠るさまはさながら猫のようで、なんともいえない保護意欲をくすぐられる。

短くない時間子供の頭を乗せ続けている腿に微かな痺れを感じながらも、シャマルは母のような慈愛に満ちた笑みを浮かべながら紅茶を片手に眠っているティレケの柔らかな髪を梳くように撫でると、ティレケはくすぐったいのか体をくねらせて寝相を変えた。

シャマルの腿に顔を埋めるように眠っていたティレケは、仰向けになりその寝顔があらわになると目を閉じながらも微かに頬を緩ませて、本当に幸せそうに眠りの安寧を享受している表情をしていた。

「よほどお兄さんが目を覚ましたことに安心したのね」

ティレケを起こさないようにシャマルはポツリと声を漏らした。

アトリが目を覚まさない五日間、ティレケは睡眠といえるようなものはとっていないかった。

朝から昼はずっとアトリの傍らで過ごし、夜になるとうなされて何度も目を覚ましていたとティレケを部屋に泊めていたフェイトとなのはが言っていた。

見る見るうちにやつれて顔色が悪くなっていくティレケをシャマルだけでなく誰もが心配していたのだが、アトリが目を覚ましたこととでようやくそれから解放されることになる。

ふと、シャマルはアトリのことを思い出した。

今、部隊長室での話し合いはどうなっているのだろうか。

途中で席をはずしてティレケと昼食をとっていたシャマルに、今も恐らく行われているであろうやり取りを知るすべはなく、無意識のうちにため息が出てしまう。

「あれ、シャマルさん。もうお昼ご飯食べ終わっちゃったんですか？」

ティレケの寝顔を見言っていたシャマルは顔を上げて名前が呼ばれた方に視線を送ると、そこにはトレーの上に山盛りの…、文字通り山のように盛られたパスタとサラダを乗せた青い髪の毛のショートカットの少女と、赤い髪の毛の少年。そして普通盛りのトレーを持ったオレンジ色の髪をしたツインテールの少女とピンクの髪の毛の少女がいた。

「あれ、ティレケちゃん…?」

覗き込むようにオレンジ色の髪の少女が座っているシャマルを見ると、シャマルの隣のイスの一つを占拠して眠っているティレケがいた。

「ごめんなさいね、スバル、ティアナ。さっき寝付いたところなの」

「イエ、じゃあ私たちは向こうで食べてきますね」

「ああ、待って。ちょっとした報告があるから」

ティレケを起こさないように声をひそめて話すシャマルの言葉に全員が首を傾げた。

「なんと、ティレケちゃんのお兄さんが先ほど目を覚ましました」

「え!? 本当ですか!?!」

「バツ! スバル!!」

シャマルの報告に歓喜の感情を大声で出すスバルに慌ててティアナは口を押さえて窘めて恐る恐るティレケの方に視線を送った。

幸いにもティレケの眠りは深いらしく、一回だけ寝がえりをうつと直ぐに規則的な寝息を立て始めるのを見て全員がほっと胸をなでおろした。

「それで、お兄さんは今どこにいるんですか?」

「今は隊長さんたちと今後について部隊長室でお話し中よ」

ティアナの問いかけにシャマルは曖昧に笑いながら答えた。

優しい主のことだ。決して悪いようにはしないだろうがシャマルの中には一抹の不安もあった。

彼は…、アトリは自分たちが闇の書のヴォルケンリッターだという事を知っていた。

そしてフェイトを見た瞬間に、極秘事項となっているフェイトの姉…、フェイトの基となったアリシアの名前を上げた。

知るはずのない事を知っているという恐怖。

そして何よりも、あの“目”だ。

湖の底のように濁りのない深い深緑色の瞳の奥には、何か…、得体のしれない何かがあつていていた。

本能ともいえるだろうか。

始めて言葉を交わした時に、人を手に掛けたことのある者にしかわからない、根源的な畏怖をシャマルはアトリに感じた。

「うん。でも、はやて部隊長のことだからテレケちゃんを手元に置くためにお兄さんごと六課に引き込むんじゃないかな…」

半ば確信めいた口調で言ったスバルの言葉に誰も反論できなかった。

「そ…それよりも早くご飯食べちゃいましょう。じゃないと午後の訓練持ちませんよ」

「そ、そうね。ここに居たらテレケちゃんの邪魔になっちゃうし」

どこか取り繕うようにキャロが声を上げると、ティアナがそれに賛同してなるべく離れた席へ移動しようとする。

テレケがまともな睡眠を貪るのが実に数日ぶりだということを見んな知っていたからだ。

なるべく声の届かない食堂の隅に座ろうとみんなが声に出さないまでも思っていたのだが、その気遣いは無用に終わってしまふ。

『あゝ。あゝ。こちらリインフォース？曹長です。FW陣のみなさんは今から三分以内に演習室に来てくださーい』

皆の気遣いの空しく、大音量で流されたリインの放送にテレケは起こされた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2836m/>

---

魔法少女と慟哭の戦士

2010年10月16日13時36分発行